

1.

「空間価値を形成するアートという選択」

日本で「アート作品」として扱われているものの多くは、
海外の基準で捉えると、必ずしもアートとは呼べないものが少なくありません。
それらはしばしば、空間を彩るためのインテリアとして消費されています。

おそらく、日本人の九割以上は、
アートを「鑑賞や所有の対象」ではなく、
空間を心地よく整えるための要素として受け取っているのではないのでしょうか。それ
自体は否定されるべきことではありません。

しかし一方で、
アートをコレクションとして捉える人々、
すなわちアートコレクターと呼ばれる層が確かに存在します。
そして、文化としてのアートを成立させているのは、
実はこの少数の視点です。

残念ながら、
一般的に「良い」「きれい」と感じられるものと、
コレクターが価値を見出すものは、必ずしも一致しません。
そこには、作家性、文脈、時代性、批評性といった、
表層だけでは測れない要素が存在します。

いま日本で求められているのは、
アートを装飾として消費することではなく、
思想と時間を内包した文化的資産として捉える視点を育てることではないしょう
か。

アートが「好きかどうか」ではなく、
社会や歴史の中でどのような意味を持つのか、
そして結果として「資産となり得るもの」であるという認識。
この理解を、建築空間や公共性の高い場所から丁寧に育てていく必要があると、私は
考えています。